作況ニュース（第１号）

水　稲
大　豆

（　発　行：令和７年４月30日　）（ 編　集：令和７年４月24日　）
発行：秋田県農林水産部

水　稲

気象変化に対応した栽培管理で高品質な秋田米を
－健　苗　育　成　と　栽　植　密　度　の　確　保－
－病害虫防除の徹底と除草剤の適正使用－

１　今後の気象の見通し

（１）東北地方３か月予報（５～７月）　【令和７年４月22日 仙台管区気象台発表】

＜予想される向こう３か月の天候＞

向こう３か月の出現の可能性が最も高い天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

５月：天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40％です。

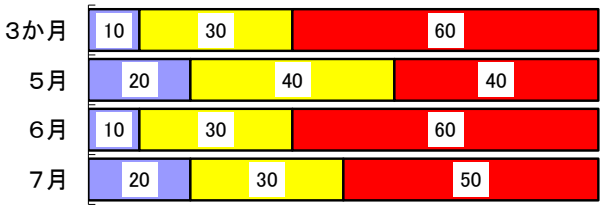
６月：期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。気温は、高い確率60％です。

７月：平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。気温は、高い確率50％です。

＜向こう３か月の気温、降水量の各階級の確率（％）＞

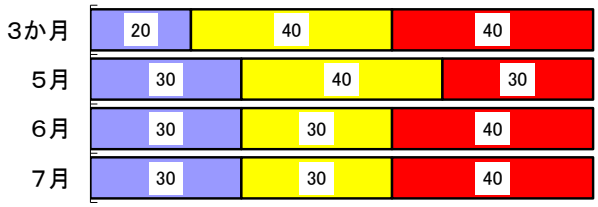
【気　温】

［東北地方］



【降水量】

［東北地方］



■低い(少ない)　■平年並　■高い(多い)

（２）東北地方１か月予報（４月26日～５月25日）　　【令和７年４月24日 仙台管区気象台発表】

＜予想される向こう１か月の天候＞

１）向こう１か月の出現の可能性が最も高い天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。平均気温は高い確率50％です。

２）週別予報

○１週目（４月26日～５月２日）

気温は、平年並の確率50％です。

○２週目（５月３日～５月９日）

気温は、高い確率60％です。

○　次回の予報発表予定：　１か月予報　毎週木曜日14時30分
　　３か月予報　５月21日（火）14時

【季節予報】https://www.jma-net.go.jp/sendai/data/tenkou/forecast/forecast.html

２　今年の水稲栽培の重点推進事項

（１）良食味米生産の推進

１）生育・栄養診断や水管理等による適正生育量の確保

２）気象変化に対応した栽培管理技術の徹底

３）多様な栽培仕様に応じたきめ細やかな栽培技術の徹底

（２）省力化技術やICT導入による低コスト稲作経営の展開

１）直播栽培や高密度播種苗育苗等の導入による生産コストの低減

２）スマート農業技術を活用した省力化や収量・品質の向上

（３）環境に配慮した米づくりの推進

１）あきたｅｃｏらいす（農薬使用成分回数10回以下）の拡大

２）農業生産工程管理（GAP）手法の導入定着

（４）「サキホコレ」を旗艦とした秋田米のブランド力向上

１）栽培技術の平準化に向けた生産者相互の技術研さんの促進

２）土づくりを土台とした基本技術の励行や適期栽培管理の徹底

Ｒ７年から「あきたこまち」から「あきたこまちＲ」に切り替わりますが、両品種の生育や収量等は同等であることなどから、作況ニュースにおいて「あきたこまち」と「あきたこまちＲ」を区別する必要がない場合は、銘柄名である「あきたこまち」と記載します。

３　県内の概況

（１）気象経過　　【秋田地方気象台】

４月上旬：　この期間、低気圧の影響により曇りや雨の日が多かった。

旬平均気温は、高いまたは平年並。旬降水量は、平年並または多いが、南部では少ない所もあった。旬間日照時間は少なく、県内のほとんどの地点でかなり少なかった。

４月中旬：　この期間、低気圧や前線の通過、気圧の谷の影響により、曇りや雨の日が多く、18日と20日は大雨の所があった。

旬平均気温は高く、かなり高い所もあった。旬降水量は概ね多く、多くの地点でかなり多かった。旬間日照時間は少なく、多くの地点でかなり少なかった。

［旬統計値（秋田）］

	気温（℃）	平年差（℃）	階級区分	降水量（mm）	平年比（%）	階級区分	日照時間（h）	平年比（%）	階級区分
４月上旬	8.0	+0.4	平年並	37.0	114	多い	23.2	44	かなり少ない
４月中旬	11.5	+1.9	高い	86.5	229	かなり多い	25.2	43	かなり少ない

（２）農作業の進捗（各地域振興局農林部農業振興普及課調査　４月25日現在）

水稲播種作業の始期は４月12日（平年４月12日）、盛期は４月21日（平年４月22日）となっている。

（３）苗の生育（気象感応試験における苗の生育状況）

４月25日現在、４月10日播種の中苗あきたこまち苗の生育は、草丈は8.2cm（平年比117%）と長く、葉数は1.9葉（平年差＋0.1葉）で平年並である。

４月２日以降、最低気温が平年より高く推移し、日平均気温も平年より高いが、日照時間は平年比46%（４月１～25日、アメダス大正寺）とかなり少なく、育苗施設内の温度確保が難しかった。この期間に播種した無加温出芽による育苗箱の被覆期間は、例年より長く、出芽のムラはやや大きかった。

４　当面の技術対策（５月上旬～下旬）

４月の気象は、多雨少照で経過し、苗の出芽はやや遅い傾向だったが、５月の気温は平年より高い見通しであり、適切な温度管理と水管理を行い、健苗育成に努める。

昨年は令和５年に続き夏季高温年だったが、白未熟粒の発生は回避され、玄米品質は回復した。しかし、倒伏面積が多く、平年並の作柄に達しなかったほ場は少なからずあり、県産米の安定供給に向けて課題が残った。昨年や一作年の作柄不安定なほ場では、６月以降の高温により、葉数の急進と茎数の確保が伴わない生育になった結果、穂数不足になり、収量が確保されない事例が多かった。茎数の早期確保の重要性を理解することと、そのためのポイントが「健苗の適期移植」や「栽植密度の確保」による円滑な活着と初期生育の開始であることを再確認して、育苗以降の春作業を実施する。

また本年は３月後半から降雨日が多く、４月25日現在、湿潤なほ場が多い。今後、耕起作業までにほ場が乾かないことが予想される。このため、移植後の土壌窒素の発現や土壌還元の進行が例年と異なり、初期生育に影響を及ぼすことも懸念される。健苗の移植を基本とし、初期生育確保のため適切な栽培管理を徹底する。

（１）健苗育成

本年は催芽に時間を要した事例、出芽揃いや被覆資材の除覆に期間を要した事例など、４月の天候不順の影響を受けている生産者は多い。しかし、晴天時は育苗施設内の温度が急に上昇しやすいため、今後は施設の温度管理に注意し、健苗育成に努める。

１）必要以上の被覆を避けるとともに、育苗ハウスの開閉等による適切な温度管理に努める。新しいハウスビニールの場合には、温度が上昇しやすいので、特に注意する。

２）徒長軟弱化を防止するため、降霜や極端な低温の心配がない限り、移植一週間前からは夜間も積極的に外気にあてる。（令和７年度稲作指導指針（以下、稲作指導指針）p.62～64）

（２）適期移植と栽植密度の確保

１）移植は、日平均気温で稚苗13℃、中苗14℃以上の日とし、最高気温15℃以下の日は移植を行わない。低温や強風下で移植すると植え傷みや活着不良で初期生育の遅れとなるので、悪天候での無理な移植は実施しない。また、早植えをすると出穂期が早まり、登熟期間が高温となるおそれがあるため、極端な早植えは避ける。

２）高品質・良食味米を生産するため、強勢茎（稚苗では第２～５節、中苗では第３～６節の１次分げつ）の確保に努める。強勢茎主体に穂数を確保するためには、移植の際に田植機各部の調整を行い、１株植付本数は稚苗では４～５本、中苗では３～４本とし、栽植密度は70株/坪以上、植付深は中苗で2.5cm程度とする（稲作指導指針p.69～70）。

（３）移植後の水管理

１）苗の活着は、気温や水温が高くなるほど早くなるが、移植時期の水温は気温より高いため、移植直後は水深を４cm程度として保温効果を高めて、活着を促進する。

２）活着後は、水深を２～３cm程度に管理し、分げつの発生を促進する。

３）高温が続くと水温や地温が高くなり、藻類の発生や土壌の異常還元を助長して水稲の生育停滞を招くことから、必要に応じて田面水の入替や一時落水を実施する。

（４）除草剤の適正使用

１）河川の水質保全などを考慮し、移植前に初期除草剤を使用しない。雑草の発生が多いと予想される場合には、移植後の初期除草剤と一発処理除草剤との体系処理を行う。

２）近年は移植期頃から高温になり、雑草の発生が早まる傾向にあることから、除草剤の散布適期を逃す事例も見受けられる。水田内に残る雑草が多いと収量及び品質の低下を招き、アカスジカスミカメの寄主となって斑点米の発生も助長するため、除草剤は使用基準を守り適期に使用する。
（令和７年度版秋田県農作物病害虫・雑草防除基準（以下、防除基準）p.315～316、338～339、稲作指導指針p.94～98）

（５）病害防除

１）**いもち病**（苗いもち、苗の葉いもちを含む）（資料編p.17）

発生量は平年並と予想される。

育苗施設の周辺や施設内に稲わら、籾殻を置かない。また、育苗期間に１個でも病斑が認められた場合は、同一育苗施設内の苗は移植しない。

播種時にベンレート水和剤をかん注しなかった場合は、次のいずれかの方法で防除する。

①播種７日後頃までにベンレート水和剤1,000倍液を１Ｌ/箱かん注する。

②播種14日後までにベンレート水和剤500倍液を500mL/箱かん注する。

③緑化始期にビームゾル500倍液を500mL/箱かん注する。（防除基準p.23～24）

２）**葉いもち**（本田）

葉いもちを対象として本田で水面施用剤（オリゼメート粒剤、ルーチン粒剤）を使用しない場合は、育苗箱施用剤または側条施用剤を使用する。育苗箱施用剤は薬剤によって使用時期が異なるので注意する。

３）**苗立枯病**

ピシウム菌の発生量はやや少なく、リゾープス菌の発生量はやや多いと予想される。

育苗期間中、低温時はできるだけ温度を確保し、土壌の湿度を適切に保つ（ピシウム菌）。

出芽期間中は32℃以上の高温にしない。また、育苗期間中は高温に注意し、適切な温度管理を行う（リゾープス菌）。

床土にオラクル粉剤、タチガレエースM粉剤、ナエファイン粉剤を使用しなかった場合は播種時にオラクル顆粒水和剤、タチガレエースM液剤、ナエファインフロアブル、ランマンフロアブルのいずれかを使用する。播種前や播種時に防除薬剤を使用しなかった場合は、出芽後、発病前にタチガレエースM液剤をかん注するか、出芽後～緑化始期にランマンフロアブルをかん注する。（防除基準p.18～21）

４）**もみ枯細菌病**（資料編p.18）

出芽までの温度は32℃を超えないようにし、出芽が揃わない場合でも被覆期間を過剰に長くしない。また、出芽後の再被覆は行わない。

緑化期以降はハウスの開閉をこまめに行い、25℃以上にならないようにする。また、通風を良くし、過湿にならないよう、かん水は午前中に行う。

５）ごま葉枯病

秋落ちしやすい条件（砂質浅耕土、黒ボク土壌、泥炭土壌、排水不良田、漏水田、老朽化水田等）で発生が多く、窒素やカリが欠乏したり、生育後期に肥切れした場合に発生が助長されるため、下記の耕種的防除と薬剤により防除する。

①たい肥等の有機質資材やケイ酸質肥料の施用により地力の維持・増強を図る。

②砂質で秋落ちしやすい水田では、マンガン質肥料を施用する。

③土壌改良や施肥などに注意し、秋落ちや根腐れ等を起こさないようにする。

④過去にごま葉枯れ病が発生したことがあるほ場や砂質かつ秋落ちする水田では、穂枯れ（ごま葉枯病菌）に登録がある育苗箱施用剤を使用する。（防除基準ｐ.28）

（６）虫害防除

１）イネミズゾウムシ

発生時期は早い、発生量は平年並と予想される。

防除の要否は、６月上旬の発生状況によって判断するが、移植前～移植時に殺虫剤を施用する場合は、前年６月の食害株率が90％以上に達したほ場とする。

２）イネドロオイムシ

発生時期は早い、発生量は多いと予想される。

防除の要否は産卵盛期（６月上～中旬）に判断するが、ＲＡＣコード１Ａ、１Ｂ、２Ｂの薬剤に対して感受性が低下している地域では薬剤の選定に注意し、移植前～移植時に本種に効果のある殺虫剤を施用する。

３）イネミギワバエ（イネヒメハモグリバエ）

第１世代の発生時期は早い、発生量は少ないと予想される。

前年多発したほ場では、本種に効果のある育苗箱施用剤を使用する。本種に効果のある育苗箱施用剤を使用しなかった場合は、移植後に産卵状況を確認し、発生が多いときは被害初期にエルサン乳剤、スミチオン乳剤、トレボン粉剤ＤＬ、トレボン粒剤のいずれかを散布する。

本種の被害は突発的に発生するため、今後の予察情報などに注意する

４）フタオビコヤガ（イネアオムシ）

第１世代の発生時期は早い、発生量はやや少ないと予想される。

前年多発したほ場では、フェルテラ剤（Ｄｒ．オリゼフェルテラ粒剤、ファーストオリゼフェルテラ粒剤など）、スピノ剤（プリンススピノ粒剤６、ルーチンアドスピノ箱粒剤など）のいずれかを育苗箱に施用する。

５）イネキモグリバエ（イネカラバエ）

発生量はやや少ないと予想される。

前年多発したほ場では、畦畔の除草を行う。薬剤による防除はグランドオンコル粒剤またはブイゲットグランドオンコル粒剤を移植当日に育苗箱に施用する。もしくは、リディア箱粒剤またはＤｒ．オリゼリディア箱粒剤を移植３日前～移植当日に育苗箱に施用する。ただし、ＲＡＣコード１Ａの薬剤に対して感受性が低下しているイネドロオイムシが確認されている地域でグランドオンコル粒剤を使用する場合は､イネドロオイムシに対して別途防除が必要である。

※（５）、（６）の詳細については、令和７年４月23日に発表した令和７年度農作物病害虫発生予察情報 発生予報第１号（５月予報）を参照する（https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/）。
また、ＲＡＣコードについては防除基準（p.６、478～482）を参照する。

（７）湛水直播栽培初期管理のポイント（カルパー粉衣土中播種）

１）品種の選定

直播栽培に適している品種は、早生の「あきたこまち」、「淡雪こまち」、「秋のきらめき」である。

２）種子の準備

催芽はハト胸状態（催芽長0.5～1.0㎜）に揃え、出芽・苗立ちの安定化のため、催芽籾に過酸化カルシウム剤（カルパー）を乾籾重量比の等倍～２倍量粉衣する。

３）本田の準備

出芽・苗立ちを揃えるため、ほ場の高低差を±2.5㎝以内にしてから耕起する。

４）代かき

代かきは少なめの水で行い、稲わらや稲株が田面に露出しないようにする。田面の均平に努めるが、過度の代かきは土壌の異常還元の助長や表層剥離の原因になるので避ける。

５）播種期

播種期は、播種早限（日平均気温が12℃以上を確保できる時期）と用水の確保できる時期及び播種晩限（出穂後40日間の平均気温19℃を確保できる日）を考慮して決定する。県北部では５月５日から15日、県中央部及び県南部では５月１日から20日であるが、「あきたこまち」は播種早限から播種晩限までの日数が短いため、できるだけ５月14日までに播種することが望ましい。

６）播種

播種時の土壌が柔らかすぎると種子落下前に播種溝が埋まり、また硬すぎると覆土が十分に行われない。いずれの場合も種子が田面に露出する原因になるので、土壌条件にあわせて落水時間を調節する。播種深度が0.5～1.0㎝の範囲になるように覆土板を調節する。

７）播種後の落水管理

播種直後は土壌を酸化状態に保ち出芽を促進するため、播種後から５日～２週間程度落水状態にする。落水日数は天候やほ場条件に応じて調節するが、播種籾数に対する出芽数の割合が10％の頃を終了の目安にする。落水管理終了後から出芽揃いまでは、３～５㎝の浅水管理を行う。

還元しやすいほ場では、短期間の落水や水の入替えにより土壌還元を防止し、苗立ちを確保する。

８）除草剤散布

必ず直播水稲に登録のある剤を選択し、散布に当たってはイネの出芽状況、雑草や表層剥離の発生状況等を総合的に判断する。

雑草の発生が多い場合には、初期剤と一発処理除草剤との体系処理を行う。（防除基準p.329～333）

【時期別・主要作業別指導事項】（移植）

月　旬	作業の種類	主　な　指　導　事　項
５月 上旬 ～ ５月 下旬	育 苗 管 理	○急激な気温上昇による高温障害に注意する。 ○追肥は稚苗で1.5葉期､中苗では２葉期と３葉期に行い、施肥後は散水して茎葉を水洗いする。 ○育苗箱全量施肥は、床土が乾きやすいので管理に注意する。 ○苗の硬化は、急に低温や強風にあてないよう徐々に行う。 ○移植の１週間前になったら夜間もハウスを開放し、外気環境に慣らす。 ○降霜が予想される場合は、ハウスをしっかり閉め保温に努める。降霜に遭った場合は、日の出前に散水する。
	いもち病の 育苗期防除	○播種時にいもち病の防除を行わなかった場合、播種14日後までにベンレート水和剤500倍液または緑化始期にビームゾルをかん注する。
	苗立枯病防除	○育苗期間中は温度管理と水管理を適切に行う。 ○播種前や播種時に防除薬剤を使用しなかった場合、出芽後、発病前にタチガレエースＭ液剤をかん注するか、出芽後～緑化始期にランマンフロアブルをかん注する。
	もみ枯細菌病 防　　除	○出芽までの温度は32℃を超えないようにし、出芽が揃わない場合でも被覆期間を過剰に長くしない。 ○出芽後の再被覆は行わない。 ○緑化期以降は25℃以上にならないように管理する。 ○過湿にならないようにかん水は午前中に行う。
	ごま葉枯病 防　　除	○たい肥等の有機質資材やケイ酸質肥料の施用により地力の維持・増強を図り、砂質で秋落ちしやすい水田では、マンガン質肥料を施用する。 ○過去にごま葉枯病が発生したことがあるほ場や砂質かつ秋落ちする水田では、穂枯れ（ごま葉枯病菌）に登録がある育苗箱施用剤でいもち病と同時防除を図る。
	畦 畔 の 補 強 と 漏 水 防 止	○畦塗り機等により、畦畔のかさ上げや補修を行う。 ○漏水防止のため、畦塗りやアゼナミシート、畦畔マルチを実施する。
	施 肥（基 肥）	○品種別・地域別・土壌別基肥量の適正化を図る。 ○土づくり肥料の施用に努める。 ○低地力田では、肥効調節型肥料の有効利用を図る。 ○輪換ほ場（大豆後初年目）は、基肥量を０～慣行の1/3として追肥重点の施肥体系で対応する。
	耕　　起	○耕深15cmを目標に行う。 ○田面の高低差の大きいほ場では、耕起前にある程度高低差を修正してから耕起する。
	代　か　き	○過度の代かきは、活着を遅らせるとともに初期生育の停滞を招くので避ける。 ○稲わらのすき込み量の多い水田では浅水で代かきし、土中に埋め込むようにする。
	移　　植	○移植は苗の生育に合わせて温暖な日に行う。 ○適正な栽植密度を確保する。 ○登熟の初期期間が夏季の高温期と重ならないよう早植は避ける。
	本田の葉いもち と 初期害虫防除	○葉いもちを対象として本田で水面施用剤（オリゼメート粒剤、ルーチン粒剤）を使用しない場合は、育苗箱施用剤または側条施用剤を使用する。 ○初期害虫が前年多発したほ場では、育苗箱施用剤等を移植前～移植時に施用する。
	補　　植	○極端な欠株がない限り補植は行わない。 ○余り苗はいもち病の伝染源となるので、ほ場に埋没する等して速やかに処分する。
	移植後の 水管理	○移植直後は水深を４cm程度とし、保温効果を高めるためにできるだけ湛水状態を保ち活着の促進を図る。 ○活着後は水深を２～３cm程度に管理して分げつの発生を促進する。 ○水の入れ替えは早朝や雨の日に行う。
	除 草 剤 散 布	○移植前の初期除草剤散布は行わない。 ○散布後７日間は止水とする。 ○同一除草剤の長年の連用は避ける。

【時期別・主要作業別指導事項】（湛水直播；カルパー粉衣土中播種）

月　旬	作業の種類	主　な　指　導　事　項
５月 上旬 ～ ５月 下旬	種子の準備	○催芽は必ずハト胸状態に揃える。 ○催芽長を１㎜以上に伸ばし過ぎない。
	カルパー粉衣	○カルパー粉衣量は乾籾重量比等倍～２倍量で行う。 ○カルパー粉衣は原則として播種前日とするが、やむを得ず保存する場合は冷暗所で蒸れないようにし、３～４日以内に播種する。 ○カルパーの粉衣を兼ねてイネミズゾウムシの防除を行う場合は、アドマイヤー水和剤との同時湿粉衣処理とする。または、ヨーバルシードＦＳの薬剤原液を種子に全量投入し混合後、カルパーの粉衣を行う。 ○カルパーの粉衣を兼ねて葉いもちの防除を行う場合は、ルーチンシードＦＳの薬剤原液を種子に全量投入し混合後、カルパーの粉衣を行う。
	施肥（基肥）	○品種別・地域別・土壌別基肥量の適正化を図る。 ○土づくり肥料の施用に努める。 ○基肥窒素施用量は移植栽培の80～100%とする。 ○側条施肥を行う場合は、速効性肥料と肥効調節型肥料（70日タイプ）をあわせて用いる。
	耕　起	○高低差を±2.5㎝以内に修正してから耕起する。
	代かき	○田面が均平になるように代かきを行うが、過度の代かきは避ける。 ○浅水で代かきし、稲わらを土中に埋め込むようにする。 ○代かきから播種までの日数が３日以内になるようする。 ○代かき後は、土壌を落ち着かせるため湛水状態にする。
	播　種	○播種日にはひたひた水程度になるよう、前もって水管理を行う。 ○播種深度は0.5～1.0㎝を目標とする。
	葉いもち防除	次のいずれかの方法で防除する。 ○ルーチンシードＦＳを種子塗沫処理する。 ○播種時に側条施用剤や土中施用剤を使用する。湛水直播栽培で播種時に基肥を兼ねて葉いもち防除を行う場合は、オリゼメート入り側条施肥専用肥料（コープガードＤ12、コープガードＤ一発664）を施用する。またはオリゼメート顆粒水和剤をペースト肥料に混合して施用する。 ○種子塗沫処理や播種時に葉いもち防除剤を使用しない場合は水面施用剤（オリゼメート粒剤、ルーチン粒剤）を使用する。
	播種後の水管理	○播種直後は、土壌を酸化状態に保ち出芽を促進するため、播種後から５日～２週間程度落水状態にする。 ○落水日数は天候やほ場条件に応じて調節するが、播種籾数に対する出芽数の割合が10%の頃を終了の目安にする。 ○落水管理終了後から出芽揃いまでは、３～５㎝の浅水管理を行う。
	除草剤散布	○必ず直播水稲に登録のある剤を使用する。 ○散布時期、量を守り、まきムラのないように努める。 ○散布後７日間は止水とし、浅水は避ける。 ○同一除草剤の長年の連用は避ける。 ○雑草の発生が多い場合は、初期剤と一発処理除草剤との体系処理を行う。

大　豆

排水対策と適期作業による高位安定生産
ー初期生育確保に向けた湿害対策の徹底ー
ー播種時期に応じた適正播種量の確保ー

1　今年の大豆栽培の基本方針

（１）初期生育確保に向けた湿害対策の徹底
（２）適正な作付計画の設定と播種時期に応じた適正播種量の確保
（３）適期作業の徹底よる収量・品質の高位安定化
（４）堆肥や土壌改良資材の施用による地力の維持・向上
（５）帰化アサガオ類やアレチウリ等の難防除帰化雑草の防除

2　主要品種の特性

表１　秋田県大豆奨励品種の特性

品種名	区分	早晩性	播種時期	開花期（月．日）	成熟期（月．日）	主茎長（cm）	主茎節数（節）	分枝数（本）	百粒重（g）	子実重（kg/10a）
リュウホウ	中粒白目	中	5月下旬	7.23	10.1	66	15.1	3.7	33.6	301
リュウホウ	中粒白目	中	6月上旬	7.26	10.5	66	15.2	3.6	31.0	294
あきたみどり	極大粒黒目	晩	5月下旬	7.26	10.11	77	15.6	4.3	42.0	298

1）秋田農試大豆奨励品種決定調査の値。
播種時期が5月下旬の「リュウホウ」は平成20年～29年のうち最大値と最低値を除いた8カ年の平均値、
6月上旬の「リュウホウ」は平成27年～令和6年のうち最大値と最低値を除いた8カ年の平均値、
「あきたみどり」は平成19年～28年のうち最大値と最低値を除いた8カ年の平均値。
2）「あきたみどり」は認定品種。
3）百粒重、子実重は粗子実から各種被害粒を取り除き、篩目5.5mm以上の精子実重を水分15%換算した値。

3　当面の技術対策

（１）ほ場の選定

１）大豆の安定生産には、適正な出芽数や初期生育の確保が重要である。発芽時及び生育初期は特に湿害に弱いため、排水の良いほ場を選定する。
２）水田転換畑など肥沃なほ場を選定する。大豆作付け年数の長期化は、生育の小型化に伴う減収（図１、２）や土壌伝染性病害、マメシンクイガ等の被害が増長する場合があるので避ける。

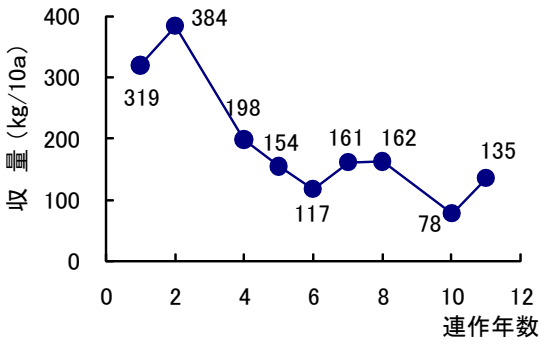


図１　連作年数と収量の推移
１）平成12～22年：秋田農試大豆連作ほ場

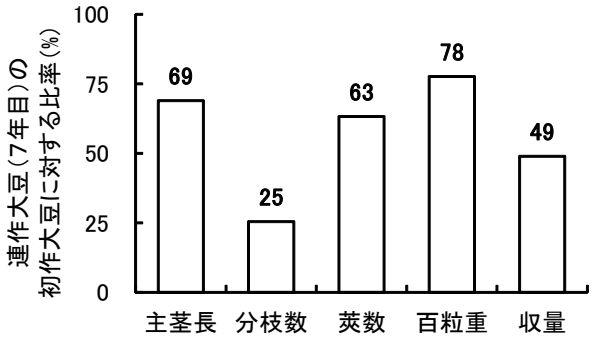


図２　連作大豆（連作７年目）の生育と収量
１）グラフ上の数値は初作大豆を100とした時の連作大豆（７年目）の値（品種：リュウホウ）
２）秋田農試大豆連作ほ場（平成12、平成18年）

（２）排水対策の徹底

１）地表面排水と地下排水によるほ場の排水対策を徹底し、地下水位を40cm程度にする。

２）地表面排水は、ほ場周囲に明きょ（排水溝）を掘り、条件によりほ場内にも設けて速やかに行う。ボトムプラウ、培土機、溝掘り機などを利用して、幅20～30cm、深さ15～25cm程度の溝掘りを行い、排水溝は必ずほ場外の排水路につなげる（図３）。

３）更に対策が必要な場合は、本暗きょや弾丸暗きょ、心土破砕等による地下排水対策を行う。弾丸暗きょや心土破砕の間隔は３～５ｍ前後、深さは30cm程度とし、本暗きょに直交させる（図４）。

４）モミガラ補助暗きょの施工は、排水対策（湿害対策）に有効である。

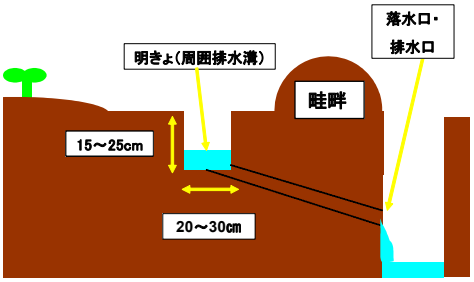


図３　明きょから排水路への排水

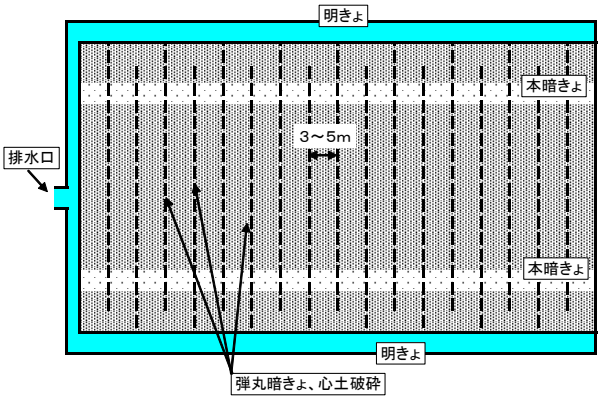


図４　排水対策（明きょ、弾丸暗きょ）の施工例

（３）土壌改良資材・堆肥の施用及び施肥の目安

１）大豆の最適土壌pHは6.0～6.5であり、pHが低下すると養分吸収が阻害されるため、pHが低いほ場では石灰質資材（炭カル、苦土石灰等）を施用してpHを改良する。

２）土壌改良資材の施用は土壌分析結果に基づくことを原則とするが、石灰質資材、リン酸資材（ようりん等）ともに現物60～120kg/10ａ程度を目安とする。堆肥は、有機物（腐植）を補給し、土壌の物理的・化学的性質を良好に保つため、大豆の作付け年数や前年の生育等を考慮して積極的に施用する。（大豆指導指針p.20～23、堆肥の特性は稲作指導指針p.42　表－６）

３）基肥窒素量は、水田転換初年目畑及び２年目畑では窒素成分で０～１kg/10a程度、転換３年目以降は窒素成分で１～３kg/10a程度を施肥する。また、窒素肥料の多施用は、過繁茂や倒伏、根粒の着生阻害や窒素固定活性の低下を招くため行わない。

（４）適正砕土率の確保

１）土壌の砕土率が低いと出芽率や土壌処理除草剤の効果等に影響するため、砕土率（２cm以下の土塊の割合）は70%以上を確保する。

２）目標砕土率を確保するため、耕起作業はほ場の水分条件を見極めて行い、土壌水分が高い状態での耕起は行わない。作業速度はやや遅いが、アップカットロータリー等の使用は砕土率向上に有効である。また、同一日の複数回耕起は、作業機械の沈下に伴う下層の粘土層の練り上げが懸念されるため避ける。

３）耕起から播種までの作業は出来る限り同一日に実施する。ロータリーシーダ、ドライブハローシーダ等は、耕起（整地）、施肥、播種作業を一行程で行うことが可能で省力化が図られる。

（５）種子伝染性病害等の防除

紫斑病の種子消毒にはクルーザーＭＡＸＸを使用する。また、クルーザーＭＡＸＸは鳥害　（ハト、キジバト）に対する忌避効果があるほか、生育初期の病害（茎疫病、黒根腐病）や虫害（タネバエ、ネキリムシ類、フタスジヒメハムシ等）の同時防除が可能である。

（防除基準p.51～55）

（6）適正な栽植本数を確保するための播種量

1）大豆の播種適期は、出芽が安定する５月下旬～６月中旬であり、極度の早播（５月20日頃）は避ける。また、大豆の生育量は、播種期の遅れに伴い小さくなり子実重は低下するため、播種期が遅れるほど播種量を増やして栽植本数及び生育量を確保する（表２）。

2）欠株を防止するために、１株２粒の点播とする（表２）。

表２　播種時期別の播種量等の目安（品種：リュウホウ）

播種時期	播種粒数（粒/10a）	播種量（kg/10a）	畦間（cm）	株間（cm）	1株播種粒数（粒）
5月下旬～6月上旬	13,300～16,800	4.0～5.0	75	16～20	2
			70	17～21	2
6月中旬	17,800～22,200	5.3～6.6	75	12～15	2
			70	13～16	2
			65	14～17	2
6月下旬	25,000～33,300	7.5～10	75	10	2
			70	10～12	2
			65	10～12	2

＊播種量は百粒重を30gとして算出。

（7）生育初期の湿害回避を目的とした播種技術

小畦立て播種や耕うん同時畝立て播種は生育初期の湿害回避に有効な播種技術である。湿害の発生状況や土壌条件等を考慮し、必要に応じて導入する。

表３　湿害回避を目的に開発された主な播種技術の特徴

技術	技術の特徴	スピード	作業ポイント	必要な農機
小畦立て播種	事前に耕起した後、高さ8～10cm程度の畦を立てながら播種する方法	1.5～2.0ha/日程度 適応馬力：30馬力程度（耕幅220cm）	事前の耕起で砕土率を確保する。 土壌水分が多いと作業性が劣るので注意。	爪配列を並び替えた代かきハロー ※粘土には不向
耕うん同時畝立て播種	耕うんと同時に高さ10～15cmの畝を立てながら播種する方法（事前耕起不要）	1.5ha/日程度 適応馬力：60馬力以上（耕幅220cm）	前作水稲残さが多い場合は事前に鋤き込む。 土壌水分が多いと作業性が劣るので注意。	爪配列を並び替えたアップカットロータリー ※土性を選ばない

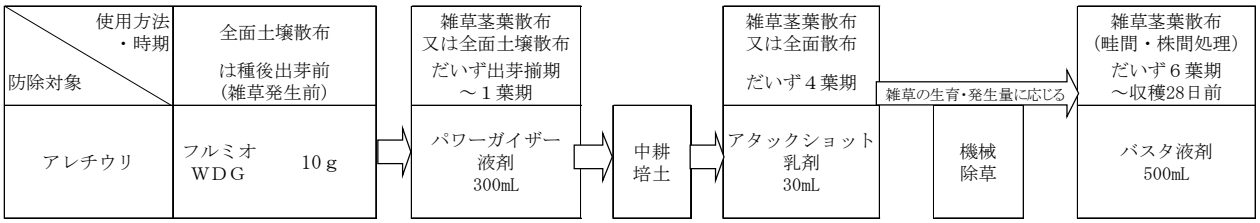
（8）雑草対策

1）大豆生育期間中のほ場に発生する優占草種をもとに、播種時に使用する土壌処理剤を適切に選択する。（防除基準p. 346～351）

2）晩播や不耕起播種のほ場では、播種時の雑草生育量が大きくなるため、必要に応じて事前に非選択性除草剤の散布を行う。

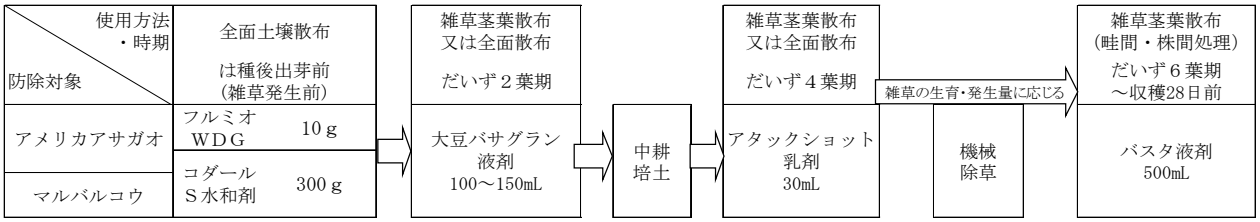
3）帰化アサガオ類やアレチウリといった難防除帰化雑草の発生するほ場が増加している。これらの雑草は、ほ場内に蔓延すると完全に防除することが難しいため、ほ場内外の雑草種に注意し、疑わしい雑草を見つけた場合は関係機関へ相談するなど初期対応を徹底する。

また、大豆ほ場に帰化アサガオ類やアレチウリの侵入が確認された場合は、①大豆の生育ステージに合わせた体系防除の実施（図５、６）、②作業機械による周辺ほ場等への拡散防止のため、当該ほ場での作業を最後に行うなど、防除対策を徹底する。（防除基準p. 348～350）



注）図中の薬剤量は10ａ当たりの使用量。

図５　アレチウリの防除体系図



注）図中の薬剤量は10ａ当たりの使用量。

図６　アメリカアサガオ、マルバルコウ(帰化アサガオ類の一種)の防除体系図

＊上図（図５、６）における薬剤の使用量等については、防除基準（p. 346～355）を参照する。

＊フルミオＷＤＧは、使用後に著しい降雨があると薬害を生じるおそれがある。また、微量でも他作物に影響を与えるおそれがあることから、散布に用いた器具類のタンクやホース、ノズルは「フルミオＷＤＧ洗浄剤」を用いて洗浄する。

＊パワーガイザー液剤は、湿害等により大豆が軟弱気味に生育している場合や処理後３日間の平均気温が16℃を下回ると予想される場合、処理後に連続した降雨が予想される場合は強い薬害が生じるおそれがあるため使用しない。

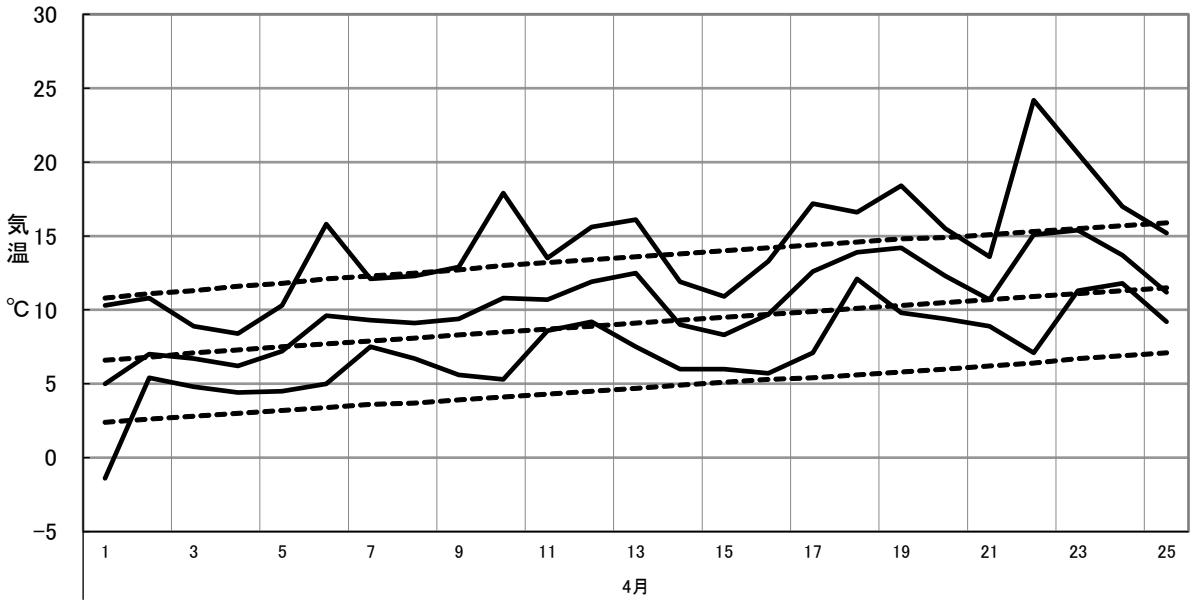
＊アタックショット乳剤は、湿害等により大豆が軟弱気味に生育している場合や処理後３日間の平均気温が17℃を下回ると予想される場合、処理後に連続した降雨が予想される場合は強い薬害が生じるおそれがあるため使用しない。

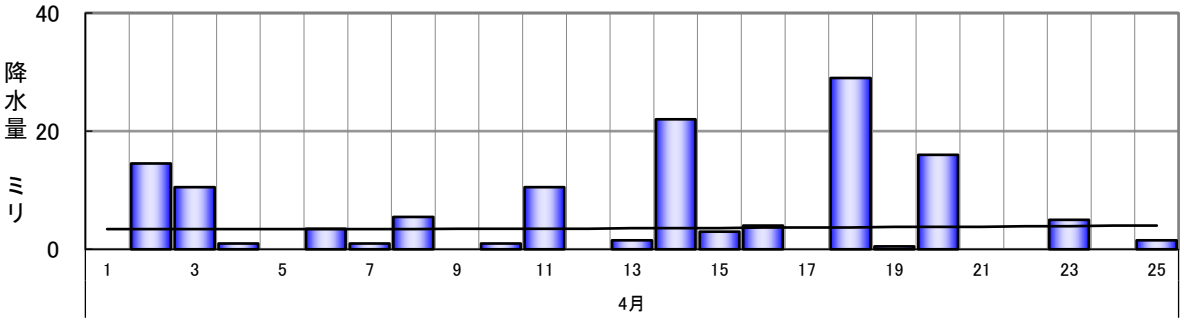
＊コダールＳ水和剤は水稲に薬害を生じるおそれがあるため、翌年に水稲栽培を行うほ場では、コダールＳ水和剤を使用しない。

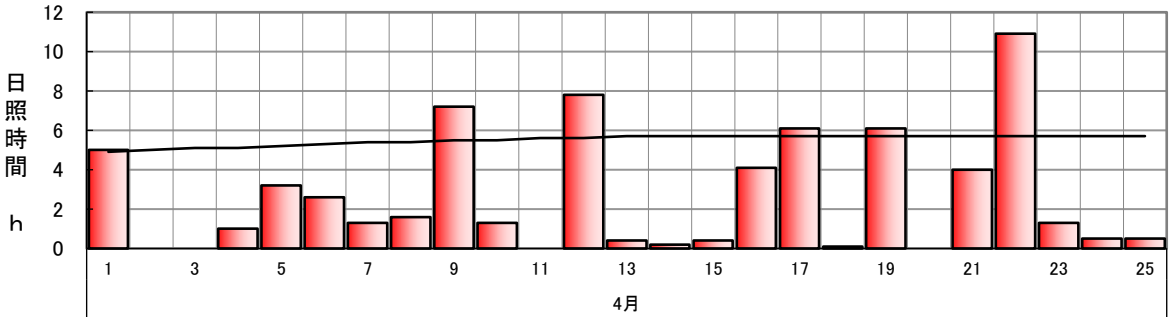
資　　料　　編

１　気象経過

（１）令和７年４月１日から４月25日の気象経過図（観測地点：秋田地方気象台）







２　農作業の進捗状況

（各地域振興局農林部農業振興普及課調査　４月25日現在）

	播　種　時　期			本田耕起
	始 期	盛 期	終 期	始 期
県　　北	４月11日(－１)	４月18日(－１)	－	－
中　　央	４月９日(－１)	４月19日(＋１)	－	４月22日(＋７)
県　　南	４月19日(±０)	４月24日(－１)	－	－
全　　県	４月12日(±０)	４月21日(－１)	－	－

（始期：５％、盛期：50%、終期：95%）

３　気象感応試験

（１）試験設計

１）目　　的

当該年の気象と水稲の生育の関係を明らかにするため、耕種方法を一定にし、作柄解析ならびに稲作指導上の資を得る。

２）試験実施場所

農業試験場内水田ほ場（秋田市雄和相川）　　※毎年、同一ほ場で実施

３）試験方法

表１　供試品種と苗の種類・育苗場所等

場　所	農試育苗ハウス		
苗　別	中苗		
品　種	あきたこまちＲ		
播種量	乾籾100ｇ/箱		
育苗様式	無加温出芽、ハウス内35日育苗		
播種日 （基準日）	４月４日 （４月５日）	４月10日 （４月10日）	４月21日 （４月20日）
移植日	移植なし	５月15日（標植）	５月26日（晩植）

表２　耕種概要

区　名	標植 （平成12年から試験開始）	晩植 （平成29年から試験開始）
移植時期 （基準日）	５月15日（予定） （５月15日）	５月26日（予定） （５月25日）
栽植様式	栽植密度：30cm×15.7cm、(21.2株/㎡、70株/坪) 機械移植、植付け：１株４本程度	
施肥量 (kg/10a)	基肥　7－7－7　(N － P_2O_5 － K_2O) 追肥　2－0－0　(N － P_2O_5 － K_2O)、減数分裂期にあわせて	

（2）稲作期間の気象

４月１半旬以降、最低気温は平年より高く経過し、平均気温も２半旬以降、平年より高く経過した。降水量は４月１半旬以降、平年並に経過し、４半旬は平年を上回った。日照時間は４月以降、平年を大きく下回って経過した。

また令和７年の４月１～25日の降雨日数は、16日と過去10年で最も多かった。

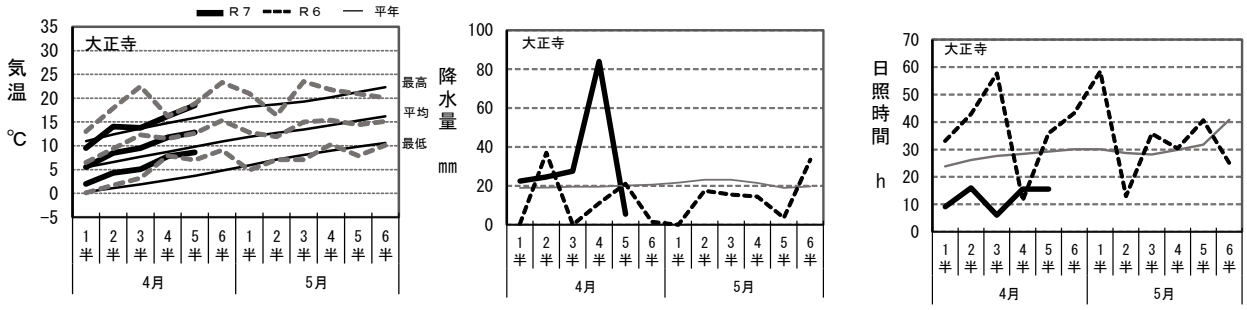


図１　令和７年の稲作期間中の気象推移（４月25日現在、半旬別、アメダス観測地点；大正寺）

表３　４月１～25日の降水日数（アメダス観測地点；大正寺、降水量0.5㎜以上）

H27	H28	H29	H30	H31	R2	R3	R4	R5	R6	R7
8	8	10	13	10	14	10	8	8	5	16

（3）苗の生育概況（農業試験場）

播種以降、日照時間は平年よりかなり少なく、被覆資材下の育苗箱内温度が上昇し難かったことから、４月４日播種苗と10日播種苗ともに出芽までの日数は７日間と近年では長かった。

４月25日現在、草丈と乾物重は平年を上回っているが、葉数は平年並だった。

１）４月４日播種

４月25日現在、苗の生育は、草丈は9.9cm（前年比99%、平年比123%）、葉数は2.2葉（前年差－0.6葉、平年差－0.1葉）だった。また、苗100本当たりの乾物重は1.19ｇ（前年比77%、平年比119%）だった。

２）４月10日播種

４月25日現在、苗の生育は、草丈は8.2cm（前年比82%、平年比117%）、葉数は1.9葉（前年差－0.1葉、平年差0.1葉）だった。また、苗100本当たりの乾物重は0.89ｇ（前年比80%、平年比120%）だった。

表４　気象感応試験における苗の生育　　（４月25日調査）

播種日	草丈			葉数			乾物重(100本当り)		
	本年	前年比	平年比	本年	前年差	平年差	本年	前年比	平年比
	cm	%	%	葉	葉	葉	g	%	%
4月4日	9.9	99	123	2.2	−0.6	−0.1	1.19	77	119
4月10日	8.2	88	117	1.9	−0.1	+0.1	0.89	80	120

注1. 播種量:乾籾100g/箱
2. 育苗場所:農業試験場内育苗ハウス(無加温)
3. 平年値:4月5日(基準)播種:平成22～令和6年の平均、4月10日(基準)播種:平成12～令和6年の平均

育苗期のいもち病防除を必ず行いましょう!

いもち病対策は育苗期の防除が重要です。

・田んぼのいもち病は、苗にいもち病が発生し、それに気づかずに田植えすることで発生します。
・育苗期のいもち病防除は、田んぼでの発病を防ぐ第一歩ですから必ず行いましょう。育苗箱施用剤では苗に発生するいもち病を防ぐことはできません。

いもち病激発ほ場(8月上旬)

穂いもち被害

育苗期のいもち病防除の手順

種　子　消　毒

育苗期のいもち病防除　次のいずれかを選択

ベンレート水和剤

500倍 500mℓ／箱
播種時～播種14日後までにかん注
又は1,000倍 1ℓ／箱
播種時～播種7日後頃にかん注

50ℓの水とベンレート水和剤1袋(100g)で育苗箱100枚分ができます（500倍の場合）。

育苗期のいもち病防除：灌注処理

ビームゾル

500倍 500mℓ／箱
緑化始期にかん注
（べた張り除去後速やかに）

250ℓの水とビームゾル1本(500mℓ)で育苗箱500枚分ができます。

緑化始期：べた張り除去の様子

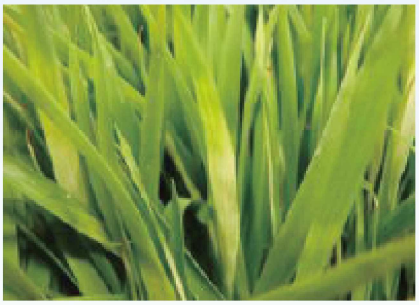
本田の葉いもち防除
（育苗箱施用剤、側条施用剤、水面施用剤のいずれかで必ず行う。）

（注意事項）
●ビームゾルでは、低温時や極端な高温時(30℃以上)に薬害が生じることがあります。適温管理に努め、健苗育成をこころがけましょう。
・使用前にはラベルをよく読んでください。・ラベルの記載以外には使用しないでください。・本剤は小児の手の届くところには置かないでください。・防除日誌を記帳しましょう。

編集：秋田県農業試験場・秋田県病害虫防除所　　発行：秋田県植物防疫協会・秋田県産米改良協会
令和7年3月

もみ枯細菌病の発生を防ぐため、育苗期の温度・水管理を適切に行いましょう

○もみ枯細菌病は、催芽～緑化期の高温・過湿状態で発生しやすい病気です。
○特に、**出芽後の再被覆**により発生しやすくなります。
○発病した苗を移植すると本田で枯死します。


苗の白化症状（初期症状）

坪状に発生した状態

枯死による株の消失

①育苗箱は十分洗浄し、「ケミクロンG」等で消毒する。

②出芽までの温度は32℃を超えないようにし、出芽が揃わない場合でも被覆期間を過剰に長くしない。

③出芽後の再被覆は行わない。

④緑化期以降は25℃以上にならないように管理する。

⑤過湿にならないようにかん水は午前中に行う。

令和2年1月　編集：秋田県病害虫防除所・秋田県農業試験場　発行：秋田県植物防疫協会・秋田県産米改良協会

令和７年度「作況ニュース」発行計画

号	発行日	主　な　記　事	主　な　資　料	普及定点調査
1	４／30 （水）	○令和７年度水稲栽培の重点推進事項 ○令和７年度大豆栽培の基本方針 ○天候予測と当面の技術対策 （田植えと田植え後の管理､除草等）	○天候予想等 ○苗の生育状況 ○本田の作業進捗状況	
2	５／30 （金）	○水稲生育初期の水管理 ○大豆播種後の栽培管理(中耕、培土)	○田植え時の苗生育 ○活着状況 ○本田の作業進捗状況	直播苗立調査
3	６／16 （月）	○水稲の生育診断 ○水稲の病害虫防除対策	○稲の生育状況(６／10)	６／10 草丈・茎数・ 葉数
4	６／30 （月）	○水稲生育調節と水管理 ○水稲の幼穂形成期予想 ○水稲の病害虫防除対策 ○大豆の初期生育状況と栽培管理	○稲の生育状況(６／25)	６／25 草丈・茎数・ 葉数・葉色
5	７／９ （水）	○幼穂形成期の生育診断と穂肥 ○水稲の病害虫防除対策 ○大豆の生育状況と栽培管理	○稲の生育状況(７／４) ○土壌窒素の消長	７／４ 草丈・茎数・ 葉数・葉色
6	７／18 （金）	○減数分裂期の予想と水管理 ○生育・栄養・倒伏診断 ○水稲の出穂期予想 ○水稲の病害虫防除対策 ○大豆の病害虫防除対策	○稲の生育状況(７／15) ○減数分裂期の窒素追肥	７／15 草丈・茎数・ 葉数・葉色
7	８／25 （月）	○水稲の出穂状況、穂数、粒数調査 ○水稲の刈取診断 ○大豆の生育状況と病害虫防除 ○大豆の刈り取り、乾燥、調製	○稲の生育状況 （７／25、８／20） ○穂数、粒数の状況 ○刈り取り適期情報	○７／25 草丈・茎数・ 葉数・葉色 ○出穂期調査 ○８／20 穂数、１穂当 たり籾数
8 総括編	12／19 （金）	○令和７年度の総括 ○令和８年度の対策・重点指導事項	○作柄の解析と対策	10／31 収量調査

令和７年度「作況ニュース」編集者名簿

秋田地方気象台		調　査　官	戸　堀　博　之
東北農政局秋田県拠点		統計専門官	黒　川　嘉　紀
秋田県農業協同組合中央会		副 調 査 役	藤　倉　耕　太
秋田県植物防疫協会		事 務 局 員	加　藤　武　光
全国農業協同組合連合会秋田県本部	米穀部 米穀総合課		阿　部　涼　平
秋田県農業試験場		作 物 部 長	松　本　眞　一
		生産環境部長	伊　藤　千　春
作物栽培チーム		上席研究員	柴　田　　智
〃	（水　　稲）	上席研究員	伊　藤　正　志
〃	（水　　稲）	研　究　員	納　谷　瑛　志
〃	（大　　豆）	研　究　員	平　谷　朋　倫
土壌基盤チーム	（土壌肥料）	主任研究員	薄　井　雄　太
〃	（土壌肥料）	研　究　員	熊　谷　俊　彦
病害虫チーム	（病 虫 害）	主任研究員	髙　橋　良　知
〃	（病 虫 害）	技　　師	保　坂　美　海
病害虫防除所　発生予察チーム		主　　任	渡　辺　恭　平
園芸振興課調整・普及チーム		技　　師	本　間　和　樹
水田総合利用課農産・複合推進チーム		チームリーダー	片　野　英　樹
〃		副 主 幹	加　藤　雅　也
〃		技　　師	高　橋　　柊
〃		技　　師	鈴　木　雄　也

各地域における技術情報等のお知らせ

各地域における技術情報等についての問い合わせは、最寄りの地域振興局農林部農業振興普及課に電話またはＦＡＸでお願いします。

各地域振興局	電話番号	ＦＡＸ番号
鹿　角 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-23-3683	0186-23-7069
北秋田 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-62-1835	0186-63-0705
山　本 地域振興局農林部農業振興普及課	0185-52-1241	0185-54-8001
秋　田 地域振興局農林部農業振興普及課	018-860-3410	018-860-3363
由　利 地域振興局農林部農業振興普及課	0184-22-8354	0184-22-6974
仙　北 地域振興局農林部農業振興普及課	0187-63-6110	0187-63-6104
平　鹿 地域振興局農林部農業振興普及課	0182-32-1805	0182-33-2352
雄　勝 地域振興局農林部農業振興普及課	0183-73-5114	0183-72-6897

記事についてのお問い合わせは

秋田県農業試験場　　℡　018-881-3330
秋田県病害虫防除所　　℡　018-881-3660
秋田地方気象台　　℡　018-864-3955
東北農政局秋田県拠点　統計チーム　　℡　018-895-7303
秋田県農林水産部水田総合利用課（農産・複合推進チーム）　　℡　018-860-1786
園芸振興課　　（調整・普及チーム）　　℡　018-860-1801

【次回の発行日は５月30日（金）の予定です】